

浅海定線調査 (要約)

小泉 広明・高坂 祐樹

目的

陸奥湾の海況の特徴や経年変動などを把握し、海況予報のための基礎資料を得るために、昭和47年度から実施しているものである。

なお、本報告は平成20年1月から12月までの調査結果をとりまとめたものである。

材料と方法

1 調査船

なつどまり (24トン、770ps、16.5ノット)

2 調査点

陸奥湾内の8点(図1)。

3 調査方法及び項目

調査方法は、平成20年度「資源評価調査事業」沖合海域海洋観測及び資源管理体制強化実施推進事業に関わる海洋観測調査指針(東北ブロック関係・平成20年4月・独立行政法人水産総合研究センター東北区水産研究所)に準拠した。

調査項目は以下のとおり。

① 海上気象

天気、雲量、気温、気圧、風向、風力、波浪

② 水色、透明度

③ 水温、塩分

0m層、5m層、10m層、10m以深は10m毎の各層と
底層(海底上2m)

④ 溶存酸素

St. 1～6の20m層と底層(海底上2m)及びSt. 2、4
の5m層

4 調査回数

平成20年中に毎月1回、計12回実施

調査日は次のとおり。

平成20年1月21日・22日、2月6日・7日、3月5日・6日、4月16日・17日、5月28日、6月10日・11日
7月9日・10日、8月5日・6日、9月8日・9日、10月7日・8日、11月25日・26日、12月10日・11日

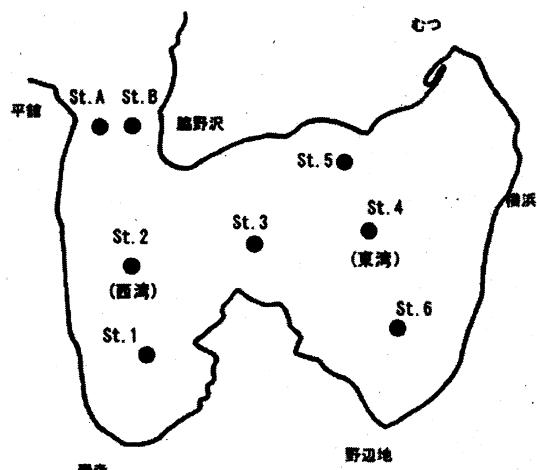


図1 調査点

結 果

西湾、東湾、全湾の平年偏差比と、観測値の最高値、最低値から見た平成20年における陸奥湾の海況の特徴は以下のとおりであった。

1 透明度の年間の推移は平年に比べ、4月に西湾でははなはだ高め、東湾、全湾でかなり高め、その他期間はやや高めからやや低めの範囲であった。

透明度の全調査点の最高値はSt. 4～6における4月の20.0m、最低値はSt. 5における1月の9.0mであった。

なお、4月に西湾のSt. 1、2で観測された18.0mは、同月の両調査点で観測された過去最高値であった。

2 水温の年間の推移は平年に比べ、3月に東湾でかなり低め、12月に西湾、東湾、全湾ともかなり高め、その他期間は平年並みからやや低めの範囲であった。

水温の全調査点の最高値はSt. Aにおける0m層の8月の23.1°C、最低値はSt. 4における30m層の3月の2.13°Cであった。

3 塩分の年間の推移は平年に比べ、11月、12月に東湾、全湾でかなり高め、その他期間はやや高めから平年並みの範囲であった。

塩分の最高値はSt. Aにおける底層の9月の34.347、最低値はSt. 5における0m層の8月の32.575であった。

4 20m層の溶存酸素量の年間の推移は平年に比べ、7月に西湾でかなり高め、10月に西湾でかなり低め、12月に西湾でかなり低め、東湾、全湾でははなはだ低め、その他期間はやや高めかやや低めの範囲であった。

底層の溶存酸素量の年間の推移は平年に比べ、7月に西湾でかなり高め、12月に西湾、東湾、全湾ともかなり低め、その他期間はやや高めからやや低めの範囲であった。

溶存酸素量の全調査点の最高値は、St. 4における5m層の3月の10.71mg/l、最低値はSt. 3における底層の9月の4.67mg/lであった。

溶存酸素飽和度の全調査点の最高値は、St. 1における20m層の7月の107.49%、最低値はSt. 3における底層の9月の57.80%であった。

なお、20m層で12月のSt. 6で観測された8.05mg/l、底層で4月のSt. 5で観測された8.96mg/lは、同月の同調査点で観測された過去最低値であった。